

りながら、今生の善をば笑へよかし、日頃待ち居りし事であると仰せられて、驚く景色も無かつたのである、是れは決して喜ではない、而し宗祖に堅固ある信仰があつた爲に、苦も轉じて喜とあつたのである故に、我々日常生活をして行く上に就いて信仰があれば、日常の苦も樂と轉じて一家和合の世とあるのである、故に日常生活を成す故に就いて信仰が大切である。

濁末の靈光

中村義明

佛日、一度西天に没してより、其聖教は月の西より出で、東を照らすが如く、漸次東國に流傳せられたり。貝多羅葉に書れたる梵本は、世々の三藏によりて、漢譯せられ、解脱涅槃の教義は代々の四依の論師によりて、各其の時代の思想を感化

せり。かくて、佛教は世界人類を救済すべき光明とありぬ。されど、其の光明は日出る迄の月の光明なりしなり。正像二千年時勢の變遷は、漸く其の光明を没したり、見よや迦葉阿難によりて傳へられし小乗も、馬鳴龍樹に依りて弘められし大乘も、疾く宗教としての生命を亡ひ、天台傳教によりて傳ひられし一念三千も、弘法慈覺の弘めし論伽三密も、教義高尚に、修行煩瑣に過ぎ、周く後人をして、眞摯に、修行する能はざらしめ、一種の學問となりたりしに非らずや、佛在世より正法に涉り、教行証兼備せる佛教は、其末に及び証果を得るものなく、更に像法の末期に至りては、眞に修行する人だになく、幾多の經論ありと雖も、そが人生の光明とはならざりしあり。是の如くにして、印度の佛教先づ滅び、唐土の佛教次で衰へ日本に弘まりし南都六宗、北京の二宗も、徒に形骸の佛教となり、世は五濁末法の暗雲に覆はれたり。

此時に當り、法然親鸞相尋で、念佛往生他力本

願の教義を唱へたり。されど、こは人生努力を否定するの厭世主義にして、毫も救世の光明とはならざりき。榮西道元によりて、見性成佛の教義も傳へられたれども、是亦教主を無視し、聖教を蔑視せる惡平等説にして、濁れる信仰を、倍濁すのみなりき。七寶莊嚴の殿堂には、金色眩き佛像を崇むと雖、そは教主釋尊の尊容に非ずして、此土無縁の大日彌陀のみ、八家九宗の寺院に、朝夕讀論するは、諸經中王の法華經に非ずして大日經觀經等の權經のみ、稻麻竹園の僧侶、佛衣を著けて談するは、出世の本懐に非ずして、破法破國の因縁のみ。斯くして佛教の秩序は増々亂れ信仰の源泉は愈にこりて、その信者中より、逆賊義時を出せしさへ、毫も怪しとせざるに至りぬ。後五百歲は今なり。大集經讖言の如く、月星の如き月氏唐土の佛教、既に隱没し、やがて法華經に勅を蒙りし本化上行菩薩出現して、日の如き、大教の興るべき時なり、法華經涌出品に、大地より涌現して

神力品に『如日月光、明、能除諸幽冥、斯人行世

間、死滅衆生關』との佛説に應じて、久遠本佛の智慧と慈然もて、世界人類の思想信仰を統一すべき、一大使命を帯びたる本化大聖は、そも奈何なる人にて在ますらん。

本化の出現は、法華經に約束せられしのみならず、佛滅後二千年間に涉りて、時代を異にし國土を異にせる幾多の人師によりて、豫言せられたりみろく菩薩は『東方に小國あり。其中唯大乘の種性のみあり』(諭伽論)と言はれ、像法に入りて三百五十年、沙車國の須利耶蘇摩も亦、『佛日西北の國に縁あり』(法華翻譯後記)と言ひ、天台大師は、『後五百歲遠沾妙道』(法華文句)と慕はれ、我傳教大師も『正像稍過己、末法甚有近』(守護國界抄)と戀はる。又像法九百五十餘年の頃支那の遵式法師は、『始、西より傳はりしは、猶月の生するが如く今復東より返るは、猶日の昇るが如し。素影、圓かに輝いて終に我土に還回せん』(天竺別集)といひ、同時代に日本の源信、僧都

も、云く『日本一州、圓機純一、朝野遠近、同皈一乘、緇素貴賤、悉期成佛』（一乘要決）と、斯の如く、滅后二千年の間に、各時國を異にして出でてたる人師の、本化出現の豫言に就て、其軌を一にせる恰も符節を合せしが如きは、げに、不可思議の現象には非ずや。法華經の約束は眞なりき。人師の豫言も亦實ありき。時末法に入りて七百十一年、後五百歲鬪諍堅固の秋に當りて、本佛の勅命に送られし本化上行菩薩は、幾多の人々の豫言に迎へられて、月氏の東方の小國、沙車の東北に方れる日本、東海安房の一漁村、小湊の浦に降誕し給ひぬ。

貞應元年壬午二月十六日の午の刻、あゝ、此日は本化降誕の聖日なりき。末法の佛使は、釋尊入滅の明日、二月十六日を以て、旭日の光明を浴び春鶯の尊き法聲に迎へられて、降臨ましませり。地神は歡喜して清泉を湧出し、龍神諸天は、喜悅して、小湊の海濱に青蓮華を咲かかめ、此聖日を紀念し玉へり。あゝ、日蓮の御名を以て、此世に

降誕し玉へる本化大聖。あゝ、本佛の智慧と慈悲を以て、末法五濁の闇を照し玉ふ吾宗祖。世界人類の思想と信仰とは、唯、大聖の權威によつてのみ統一せられ、世界人類の心靈は、唯、吾祖の光明に照されてのみ救濟せられなん。

新春のさげび

鈴木本開

た互共が、此の世に處して行くには、どうしても是の二大要素を缺てはなりません。そは何かと云ふに、即ち一には深く反省し、精しく研究し充分の覺悟を定めてをく事、二には大事に當つては其の身を犠牲にする決心をもつてゐる事であります、是の一方いづれでも缺ければ、危険猶更に兩方共に缺けたから、そは實際御話になりません。物質的の文明にのみよつて、人生の幸福を得られぬ事は、西洋諸國の實狀がよく証據立てゝをります、十六世紀頃から數百年間の努力を重て來て